

## 今、目の前のボールを上げる

日本語日本文学科 馬場 良二

去年の3月、文学部の謝恩会で、男子バレー部のマスタ君が寄ってきて、「練習に来てくれ」と言ってくれた。彼は英文所属で、私が男子バレー部の顧問だということを知っていた。在籍中の4年間に私が体育館に行ったのは1度か2度だろうけれど、それでも覚えていてくれた。それに、私が言わせたんじゃなくて、むこうから言いに来てくれたんだから、まんざら嘘でもないだろうと思い、体育館に通うことにした。

1992年3月、37歳で結婚し、1993年2月に長女が生まれた。1997年6月、42歳で次女、1999年2月に長男にめぐまれた。子どもというのは出てきてからがたいへんだ。乳飲み子と歩き始めた女の子と小学校に上がる娘。出張はできなくなった。平日に授業参観があるときは、休講にした。

ある日、首が回らなくなり、寝起きもままらなくなって、整形外科に行った。何か運動しましたかと聞かれたが、運動などする時間があるはずもなく、「この間、家内と二人で歩きました」と言うと、それだ。歩いただけで首がかたまる体になっていた。

西門前の道路をわたろうと歩道を降りながら後ろ足で地面をける、けった方の足のふくらはぎがつるようになった。バレーの練習にでても、パスをしながら飛んでくるボールを受けようと一歩さがった瞬間にふくらはぎがつる。ある時、冷えるというところがわかり、それ以来、真夏でも靴下をはいて寝ている。

練習に行かなくなった。50も半ばに差し掛かるころ、背筋がのびず、足が前に出ないことが自分で分かった。力いっぱい勢いをつけるのだが、腿とひざが前に出なくなっていた。

記憶に残るけがの最初は学部の1年生のとき。4月に入部して、まだ5月中だったと思う。ウォーミングアップで床にあおむけになっていた同じ新入生の首を踏みそうになり、右足首をねんざした。多分、あとずさりをしていたのだと思う。右足

をさげたところでチームメイトの首があることに気づき、右足のかかとを浮かせたのだが、バランスがたもてず、かかとをおろさぬままねじったのだろう。

2年の時、庭にプレハブの物置を立てた。重い部材を持ち上げようとして、腰を痛めた。腰痛が持病になり、ダマシダマシ現役をつづけた。

大学は東京だったから長野は近く、夏の合宿は毎年木崎湖畔の民宿だった。2年生の時は、いつも借りている体育館が使えず、天井の低い、木造だった。床がしっかりしていないからだろうか、ネットを張るポールをワイヤで床に固定していた。パス練習だったと思うが、うしろにさがった瞬間そのワイヤに足をすくわれ、いきおいよく尻餅、右手をついた。合宿が始まってまだ間もなかったように思うが、残り日々は練習に参加できなかった。

2年の合宿の手首は、病院に行かぬまま、はれがひくのを待って練習を再開した。3年の春は、セッターとしてスタメンになっていた。人数の少ない弱小チームで、他にいなかったからだろう。サーブを打とうとエンドラインに立つと、ギャラリーから「中学生みたいだ」と聞こえた。全然、気にならなかった。もともと自分に自信がなかったからに違いない。

春は連休をすべてつぶして関東リーグ、12部中の11部だったと思う。秋はリーグ戦のあとに大阪外国語大学との外大戦だ。毎年、運動部が総あたりで試合をする。私が3年生のときは、大阪であった。

夏休みに筋トレに励み、からだを酷使した。その頃、スピードスケートのオリンピック選手がトレーニングのしすぎで体をこわし、滑れなくなったという新聞記事を見た。自分には関係ないことだと思っていたから、休まずつづけ、練習が再開し、リーグ戦が終わるころ、右手首がはれだした。全身疲れ切って、その疲労が回復しない。なんとか1限に出席しても、ベンチ式の椅子に横になっていた。ノートをとっている授業中、鉛筆が指からぬけおちた。何より、ぬいだ靴を右手では持てないほどにはれあがった。それでも、練習をした。ボールを投げ、床に打ちつけているうちに、手首は麻痺し、痛みはうすらいだ。痛さをこえて、感覚がなくなるのだ。

私はベンチに回り、コンビを組んでいた下級生のセンターとセッターを交替した。

建て替えられる前の大阪府立体育館での試合。第1セットをとられて、セッター交替。手首はいくぶん回復していた。サーブレシーブが少しみだれ、ネットの上をめがけて飛んでくる。必死でとびつき、白帯の上でとらえ、下級生のセンターにAクイック、決まった。けれども、セッターのオーバーネットをとられた。今でも忘

れない、あのトスは私の会心のトスだった。私の上げることでできた最高のトスだった。空中に躍び上がり、ネットより高い位置で、しかも、相手側コートに入っていたボールをとらえ、トスにした。このセットも落とし、センターがセッターにもどり、0 vs 3で負けた。間違いなくオーバーネットの反則だったけれど、でも、あのトスは私の上げることでできた最高のトスだった。

修士にはいって、2年間ブラジルに留学した。帰国してから残りを1年、教職免許を取るために科目等履修生を1年。その間に、右手の小指を脱臼し、右ひざを捻挫した。

小指はブロックの時。ライトで跳んで、小指1本だけでおかしな具合に受けたらしい。指の股が裂けていたのに、この時も病院に行かなかった。去年、左手首を骨折したときに医者に見せたら、腱が切れているという。切れたまま30年以上、使っていたことになる。

膝もブロックの時だった。腱の切れた指でブロックしていたのだろうか、それとも、捻挫した膝で跳んでいたのだろうか、覚えていない。とにかく、着地に失敗して膝をひねった。パンパンに腫れ、痛くて眠れなかった。なんで病院へ行かなかったのだろうか。ひねってすぐに行くべきだったし、眠れないほど痛い夜が続いても、それでも行かなかった。

学部の4年の時には、アイススケートで転び、右手首をかばって右肩を氷に打ちつけた。とうに引退していたが、それでも練習に出つづけた。

平成元年に熊本へ赴任した。

体育の授業の一環としてアイススケートがあり、毎年必ず、今でも、参加する。

アイススケートは中学生の頃好きになった。冬になると代々木体育館のリンクに通い、受験勉強が嫌で嫌でたまらなかった高校の時には、一番の息抜きだった。

平成5年くらいだったろうか、ろくにアップもせずにリンクに飛び出し、滑り始めた。と思った瞬間、足の力が抜けてひどく転び、今度は左足首をねんざした。アップをしないと、すぐに突然疲労が襲うということを知った。

ストレッチングということばは普通に使われているが、私の学生のころは耳新しかった。そのストレッチングを開発したというアメリカ人が来日し、日本の和式は

良いと言っているという記事を読んだ。別の機会に、相撲取りが「今の若いのは弱くなった。冷たいジュースがいけない。私の若いころは、酒を飲んで、次の日稽古にはげみ、汗をかいたものだ。そして、洋式はよくない」と言っていた。

熊本に来て、体育館に行かなくなり、結婚してなおさら遠ざかり、子どもが生まれて余裕がなくなった。思い出したように腕立て伏せをただけで、腰が痛くなった。7、8年前だろうか、腰を痛めたのは洋式になってから1年目だったことを思い出した。それで、ヒマを見つけては、シャガムようにした。

首を回すようになったのは、もっと前だった。40代のころ、首の後ろがむくみ、シコリができていような気がするがあった。行きつけの美容院で「これは危ない。首の運動をしなさい」と言われ、「どうやって」、「回せばいい」。それから、気がつくとき首を回すようになり、三か月もするとむくみがなくなり、軽くなった。去年までは、毎朝首を回し、シャガンでいた。

下の二人は小学校の時、合唱部だった。時々、練習がおわった頃を見はからって、むかえに行った。小学校は職場から10分、家までは15分ぐらい。熱気のこもる校舎を出ると、空はまだ明るかった。冬、凍りつく廊下を子どもたちが裸足で走っていた。外はすでに真っ暗、校庭を見上げると星が光っていた。あの頃は、家事と育児と仕事だけだった。15分間、身も心も癒された。

小学校では、PTAの役員だった。2011年春、末の息子が中学に上がると、月に1度の役員会にかよわなくなった。家事を手伝わなくした。仕事が終わると、小学校経由で健軍川の川っぺりを散歩して帰るようになった。

シャガムようになって腰痛はなくなり、2011年の秋からイナバウアーとビールマンをはじめた。タンスや本棚のそばに立ち、後ろに反り返ってつかまる。そのまま手を持ち替えて側屈。それから、片足のつま先をもって頭の後ろに持ち上げる、ように反り返る。

そして、体育館に通うようになった。子供たちが大きくなってくれたおかげだ。

はじめは、コートのを歩いたりゆっくり走ったり、ストレッチをして、壁に向かってボールを投げたり、それだけだった。少しパスの相手をしてもらったり、レシーブ練習に参加したり。夏休みの練習は月木土の9時からで、足しげく通った。ついていけるところまでついていって、冷たいシャワーを浴び、研究室に

シューズを置きに行く。体育館の室温は35度を超えていたろう。Tシャツを4枚着替え、全身の関節が順番に音を上げる。3週間も痛みがつづく、その関節周りの筋肉ができたことになる。そして、また別の関節が音を上げる。楽しかった。

通い始めて半年、10月に体育館の壁に向かって逆立ちをした。昔、好きで、よくやっていた。ささえられない。腕がわななき、全身の筋肉の一つ一つがバラバラになりそうだ。頭を真っ白にしてはいけない、ミシミシ痛む腕から力を抜いたら、頭から床に落ち、首を痛めるかもしれない。支えるしかない、腕で体を持ち上げるしかない。そして、ゆっくり、できる限りソーっとどこに行ったかわからぬ足を地につける。

アイススケートの授業で、また転んだ。4回ある最後の12月の授業だった。周りの学生と一緒に両足で軽くジャンプ。大きく尻餅をつき、右手首をかばって左手首で体重を受けてしまい、あえなく骨折。指導の先生に外科に連れて行ってもらった。

左腕の手首の関節のひじ側。関節の近くは比較的柔らかく折れやすいという。横に真一文字にきれいに折れた。金属を入れるか、手術はしないか、後者を選びギプスをはめる。私は痛みに鈍感だから、鎮痛剤もいらぬ。背中は息子に流してもらい、髪は右手だけで洗った。ギプスの先から左手の指を伸ばして、ワープロを打った。家にいるときは、家内が何でも助けてくれる。ただ、逆立ちができない。ギプスがとれても、ひと月以上できなかった。

逆立ちの爽快感たらぬ。体幹とかインナーマッスルとか言うけれど、サカダチには敵わない。何しろ生まれてこの方戦いつづけている重力を逆方向でこの身に受けるのだから、二本足で立った時の充実感が違う。ボールに触れなかったのはもちろん苦しかったけれど、逆立ちした後の背筋の緊張感が恋しかった。

2008年、末っ子も小学校3年生。出張に出られるようになった。

珍しく荷物を部屋まで上げてくれるホテルに泊まった。エレベーターに外人が入ってきたら、そのベルボーイが流暢な英語で何かしら話しかけている。「何かお手伝いできることはありませんか？」と聞かれて、英語がお上手ですね、ホテルで研修を受けるのですか？ いいえ、英語の研修はありません。オーストラリアに語学留学していたものですから。

どうしてあんなことを聞いたんだろう、私が語学教師だから？ それだけじゃない、ボーイが爽やかだったから、そして、若いのに不安そうだったから。若い人に

は未来と将来があり、未来と将来しかなく、だから、不安とは無縁で、時に高慢である、なんて思い込みに感染していたのかもしれない。だけど、そうじゃない。夢を持つ、ということは、不安なんだ。これから作らなくちゃいけない、何を作ろうか、作ったらいいいのか悩み、夢を持つ。

将来に対する不安なんてのはない。ありがたいことだ。そして、気がついた。夢と不安は裏腹なんだ。夢を持つなら不安でもいい。不安であっても、夢がないよりいい。年くって夢のない安定なんて、望まない。不安を引き受けるのであれば、誰でもいつでも夢は持てる。

九州リーグは5月末と11月初めにある。当番は九州内をめぐるから、チームにとっては遠征になる。

2013年の春のリーグは長崎で、私も行った。キャプテンは3年生で、選手と私の登録をしてくれた。その登録作業を見ていてわかったことがある。部の運営というのは簡単じゃない。

長崎でのリーグ戦では、上から6部までが大きな体育館に集まり、3日間競った。関東リーグの11部では、各校が持ち回りで会場校となった。自分たちがいつ会場校となるか、あるいは、どこが会場校となるか、自分たちが審判、線審をするのはいつか、その他諸々の事務的なことがあったに違いない。が、私は何も知らなかった。

大学から始めて2年余りでセッターとしてレギュラー、スタメンになった。トス以外何も知らない。レシーブもスパイクも練習はしたが、試合では期待されなかった。部員が少なくほかにチョイスがなかったに違いない。馬場をセッターにしよう。トスさえ上がればそれでいい。

チームメイトに守られていたんだな。何も知らず、何もわからぬままプレイさせてくれていた。

熊本県立大学男子バレー部の練習は月曜日、木曜日の午後6時からと土曜日の午前9時から。1時間前に行く。体育館を5周歩く、ひざ、太もも、足首、腰、股関節のストレッチをし、逆立ちをしてから、5周走る。練習が始まるまで、壁を相手にボールを投げ、打ち、パスをする。

練習が始まると、まずグーパージャンで2人ずつ組になりボール投げ、スナップ

練習、オーバーパスにアンダーパス、そして、2人でのレシーブ練習。ここまでがウォーミングアップらしいのだが、私はもう息が上がる。それから、1人が打ち3人がうける1対3のレシーブ練習、3対3のレシーブ練習、サーブレシーブ、打ったのをレシーブして、上がったのをトスして打って、レシーブしてをくり返す2段トス、打ったのをレシーブして、上がったのをトス、それをレシーブした人間がジャンプして打つ2段打ち、さらにアタック練習、ゲーム形式へと続く。

練習の最後までいたことはほとんどない。ゲーム形式の最中に帰るのもまれで、それ以前のどこかで帰る。いても練習にならない。無理をしたらケガをするかもしれない。怪我をしたらバレーボールができなくなる。

長期休暇では、朝9時からの練習だけになる。月木土の週3回だ。去年の夏も今年の夏もかよった。体力がついた分だけ、今年の方がきつかった。ハアーツ、ハアーツ、はあーっ、ハアーツ、ハあーっ、ハアーツ、ハアーツ、ハアーツ、はあーっ、ハアーツ、ハアーツ、ハアーツ、ハアーツ、はあーっ、胃袋が飛び出そうと、肺がつぶれようとも、ボールを追った。去年はできなかったことが今年はできた。

去年の3月、体育館に行った時のキャプテンはシゲルだった。明るく、社交的な総管3年。時はめぐり、キャプテンは真面目な熱血、テンセイになり、ついこの間、カズナリにつがれた。新入生はカオルとユウタの二人。ソーシ、セイイチ、レオ、マサル、テツロオは卒業していく。ヨーヘエはもう一年。タイキは大器、これから就活が始まる。体育館には、勤務をおえたOBも来る。警察官、消防士、学校事務、日赤の営業、証券会社、いろいろ、イロイロ。みんなが夢と不安をかかえている。

朝早く、まだ誰も来ていない体育館に立つ時、世界一しあわせだと感じる。

いつケガをするかわからないし、試合に出ることもない。でも、昨日よりきょう、今日よりあした、少しずつできることを増やしていく。何のために？

監督でもない、指導もできない、練習にもついていけない。

私は彼らと一緒にバレーボールをしつづける。